

「民主主義って何だ、何だ♪」。シールズのコールがずっと耳から離れない本日の参加者も少なくないのではないか。「安保関連法案」が参議院でも強行裁決されて成立し、戦後日本は「暗い」時代の新たな段階に踏み込んだわけだが、一方、シールズを始めとする若者が牽引した「2015年安保」の圧倒的な運動の拡大のなかに日本における民主主義の転機を感じ、**「希望」**を語る声も少なくない。私もそのように考える一人である。

これまで私は、ハーバーマスやアーレントの哲学・思想に社会批判や民主主義の根拠を学びつつ、それを日本における若者のアイデンティティ形成の課題に照らして、日本の若者と社会の現実について考えてきた。ハーバーマスやアーレントの言う民主主義の可能性と日本の若者の現実がどのように出会っているのか、あるいは出会えていないのか。実際のところ90年代以降の社会変動のなかで、私の議論の多くは若者の「生きづらさ」を焦点とするものであったが、同時にそこに常に「希望の足場」を探ってきたつもりでもある。いま、ムーブメントとなったこの若者たちの活動に寄せて、「暗い」時代を生きる思想と歴史意識の現在（コンサマトリー化）に言及できるのではないかと考えている。

1. 「暗い」時代の幸福な若者

この夏で一変したことになるだろうが、このところ若者論のトレンドは「幸福な若者たち」であった。2000年代になって格差と貧困が拡大し、その波にまっ先に襲われた若者の危機が盛んに論じられたのにもかかわらず、「暗い」時代を生きる当の若者たちは、各種の意識調査において「満足」「幸せ」とする回答を顕著に増加させてきたからである（豊泉，2010）。その傾向はその後も強まっている。「あなたは、全体として、現在の生活にどの程度満足していますか」と聞く内閣府の調査で、現在の生活に「満足」「まあ満足」と回答した20代男性の割合は、2008年の69.7%から2014年には78%にまで上昇した。もっと若い中高生を対象としたNHK放送文化研究所の調査では、「とても幸せ」「まあ幸せ」が90数%に達するのだが、2002年から2012の10年間で「とても幸せ」が、

図表2 「とても幸せ」の割合（中・高校生）

	1982	1987	1992	2002	2012
中学生	36.3	38.7	37.4	41.4	54.7
高校生	23.8	25.1	31.6	33.2	41.7

顕著に増加した。多くの学者たちが実証する「暗い」時代を生きるはずの若者はなぜ現在の生活に満足し、幸福を感じるのか。

私は「幸福の現在主義」としてこの問題に注目し、若者のコンサマトリー化する意識の現実と意義を探った（豊泉，2010）。その後、社会学者の間で議論が広がり、古市憲寿『絶望の国の幸福な若者たち』（2011）が出て、いまに続くトレンドになった。これに対して大澤真幸は、コンサマトリー化の議論を誤りではないがミスリーディングであるとし、より幸福な未来を想定できない「不可能性の時代」であるからこそ、若者はあえて現在を「幸福」として肯定するとした（大澤，2011）。古市は、現在の若者にとって「仲間」の親密圏の重要性が高まっているとして、親密圏の充足感こそが「絶望の時代」を生きる若者の「幸福」の本

質であるとした。共通するのは、若者にとって社会の未来に希望はないということ。そして、だからこそ若者は現在を幸福であるとし、あるいは親密圏のいまを幸福に生きられる、というのである。私の側から言えば、いずれも若者の幸福感の表層をなでるような解釈にとどまっており、自分自身や社会への不満を抱えた若者の複雑な意識の現実（図表3）を軽視する点で、ミスリーディングである。「生きづらさ」の時代は「不可能性の時代」でも「絶望の時代」でもない。私が提起したのは、「暗い」時代を生き抜く思想としてのコンサマトリー化であった。

図表3 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査(内閣府 2013)

私は自分自身に満足している		あなたは自国の社会に満足していますか	
そう思う	7.5	満足	2.8
どちらかといえばそう思う	38.3	どちらかといえば満足	28.7
どちらかといえばそう思わない	31.9	どちらかといえば不満	35.5
そう思わない	22.3	不満	17.2
		わからない	15.8

2. コンサマトリー化の概念と歴史

1) 「のんびりと自分の人生を楽しむ」

図表4 望ましい生き方（中学生・高校生 NHK 2013）

2) 道具的活動主義（パーソンズ）と他人指向型性格（リースマン）

コンサマトリー（consummatory）という概念は、日本では主として保守派の知識人によって取りあげられ、将来のことを考えずにいまを享樂的に生きるかのような、もっぱら否定的な価値観としてのみ流布されてきた（村上，1975，千石保，1991）。だが、この概念を社会学に導入したパーソンズ（T. Parsons 1902-1979）の議論をみれば、インストラメンタル（instrumental）な価値観に依拠する社会システム論にとって、それがいかに脅威であったかがよくわかる。パーソンズは、産業化の価値を内面化した内部指向型の社会から仲間集団に準拠する他人指向型の社会へという産業社会の転機をとらえたリースマン（D. Riesman 1909-2002）の主張（『孤独な群衆』1950，副題は「変わりゆくアメリカ人の性格について」）に対抗して、コンサマトリーの概念を自説に取り込んだ。「社会は『それ自体が目標』であるのではなく……社会を超越する諸目標を達成する手段として把握される」。そして個人とし

ての人間は、この上位の価値の実現に献身する「道具」である（「道具的活動主義」），というのである。その上でパーソンズは、他人指向型の価値の出現（コンサマトリー化）は社会の構造分化の結果であり、この上位の価値と対立するものではなく、補完的だと主張したのである（『社会構造とパーソナリティ』1964）。

パーソンズの議論はコンサマトリー化を懸念しながらも、1950年代アメリカ社会を前にして、道具的活動主義による産業主義的な社会統合の理想を述べたものである。その理想は1960年代の日本における高度経済成長期の社会統合の夢へと続いた。その夢の終わり（オイルショック）に先だって、コンサマトリー化を「病理」と批判したのが村上であった。そして産業主義の夢は、1980年代以降の新自由主義政策によって虚構と化し、1990年代にはバブルとともに破綻した。そのとき、まっ先に「暗い」時代に投げ出された若者たちは、インストラメンタルな価値をコンサマトリーな価値へと適応的に変容させて、なお「幸せ」に生き抜いてきたのである。

3) 能力主義の虚構

インストラメンタルとコンサマトリーという対概念を、ここでは「他人に負けないように頑張る」か、「のんびりと自分の人生を楽しむ」という「望ましい生き方」の選択肢に見立てている。パーソンズの場合、「人間は神の意志の実現のための道具として存在する」というのがインストラメンタルの原義であり、神の意志の実現のために個人の業績達成が求められた（活動主義）。日本では「神の意志」ではなく、「他人に負けないように頑張る」という日本型の能力主義（業績主義／努力主義）が、「努力はかならず報われる」という、産業主義を駆動するインストラメンタルな価値観として人びとに強力に作用したと思われる。一方、「のんびりと自分の人生を楽しむ」という選択肢には、経済成長（上位の価値）ではなく、自分自身の生活の充足を目的とする、インストラメンタルな能力主義に支配されないコンサマトリーな生き方への選好を見ることができるといえる。

図表1（男性）の二本の右上がりの曲線からは、経済成長がずっと続くと考えられていた1980年代まで、若い世代ほどインストラメンタルな価値観を強く内面化して「現在の生活」を不満とし、年齢が進むに従って「現在の生活」に充足して満足を増加させたことがわかる（「幸福の環」としてのシステム）。そこには「生産と開発のフロンティア」に生きるjob-mindedな内部指向型の人生を読み取ることができる。リースマンは、そうした内部指向型から他人指向型への歴史的転換を「消費と人間関係の新しいフロンティア」の出現とし、その転換を当時の中産階級に見いだしていた。日本では、その転換は高度経済成長期の終焉とともに始まるが、日本型能力主義の虚構が露呈してゆくなか、people-mindedな他人指向型のコンサマトリーな価値に「幸せ」を見いだしたのが、まずは女性であり、そして若者だったのである（「幸福の環」としての生活世界）。

一般的なコンサマトリー化が1980年代から進んだにもかかわらず、なぜ2000年代になって20代男性の「満足」が大きく高まったのかも理解できよう。コンサマトリー化は若者文化に浸透していたとはいえ、男たちの人生は1990年代半ばまで確固としてインストラメンタルなシステムに組み込まれていた（そう信じられていた）。そのシステムの破綻が多くの若者（男性）にとって歴然となったのが2000年代だった。そして2014年。男性と女性との違いも、年齢による違いも目立たなくなり、高い水準で「満足」が並んだ。コンサマトリー化が新たな

段階に進んだ可能性がある。

3 コンサマトリーな民主主義

1) コンサマトリーな経験 (デューイ)

「コンサマトリーな経験」とはどのような経験なのか。「のんびりと自分の人生を楽しむ」という選択肢に解釈の余地はあるが、「人生を楽しむ」ことが「人生の意味」を楽しむことであり、「他人に負けないように」ではなく、人生に関わる人びととの関係を楽しむことであることは、おおむね了解されるのではないか。

人間の経験を追究してインストラメンタル／コンサマトリーの概念をおそらく最初にもちいたのは、デューイ (J. Dewey 1859-1952) である。分析の核心にあるのは、「コミュニケーションは、インストラメンタルであるとともにコンサマトリーである」ということである。コミュニケーションは「必要なものを調達する交換」であるとともに、「それ自身のために享受される生活の直接的な高揚」である。そしてコミュニケーションによって意味が発生し、言葉となり、そこに社会的協同が生まれ、精神 (心) が出現する。デューイによれば、コンサマトリーの経験は本源的に意味と社会的協同に関わる経験であり、だから *people-minded* な経験なのである。それは、民主主義を統治の形態にとどまらない「生活様式」だとするデューイの思想の根源でもある。「経験のなかで、コミュニケーションのインストラメンタルで究極的な機能がとともに生かされるとき、そこには共同の生活の方法であり報酬である知性が存在し、親愛と賞賛そして忠誠に値する社会が存在する」(『経験と自然』1925)。

この著作でデューイが述べたのは、このような人間の経験(「日々の経験」)を近代の哲学が体系的に無視してきたことで、インストラメンタル／コンサマトリーな経験の局面が乖離し、自然と経験、物質と精神、客観と主観、経験主義と超越論主義といった二元論の袋小路に陥ってきたということである。近代科学、近代の産業と政治によるインストラメンタルな経験の巨大な達成の一方で、「断絶と両立不可能性が個人の生活においても集合的文化においても生じている。……これが、われわれの近代的な知的困惑と混乱の原因である」。これに対してデューイは、インストラメンタル／コンサマトリーな経験をたぐり寄せて経験の批判理論を展開し、教育による経験の再構築を企図したのである。

2) 公的領域の光 (アーレント)

アーレント (H. Arendt 1906-1975) によれば、「暗い時代」とは「公的領域の光が奪われた時代」であるという。公的領域とは、人びとが共同的な活動と言論によって、互いにかげがえのな個人として人間的世界に現れ出ることのできる空間であり、この空間を保持する権力を生成する政治的領域である。「その光が「信頼の喪失」「見えない政府」によって……さらには古き真実を護持するという名目であらゆる真実を無意味な通俗性の中におとしめる道徳的その他の説教によって消されるとき、暗闇は招来される」(『暗い時代の人びと』1968)。シールズを中心とした若者たちの活動と言論は、公的領域のこの光を取り戻す運動とみることができるのではないか。

活動のスタイルも言論の内容も、コンサマトリーな価値に彩られ、個人を「道具」と化するインストラメンタルな安倍政治との対決を際立たせた。スピーチ(言論)に立つ若者の姿は、人間的世界に「現れ出る」ということの意味を、そして公的領域の光がそこに差して込んでくることを実感させる。語られる言葉からは、さまざまな「生きづらさ」を抱えつつ私

生活の幸せ、日常生活を大切にすることが伝わり、いまや光の輪は互いに見知らぬ仲間たちを結んで、さらに世代を超えて大きく広がった。一方、この若者たちを「就職できない」、「利己的個人主義」と威嚇した政治家の言葉は、人を道具とみる現代の経済・政治システムの、民主主義とはかけ離れた姿を露呈させた。

ここで若者たちにとって民主主義とは、それぞれの「生きづらさ」への応答であり、それぞれのコンサマトリーな経験に訴えて「それ自体が目標」となり、「いま、ここ」にある活動と言論を通じて「これだ」とコールされた。瞬く間に運動が拡大したことは、その経験とスタイルが広く共有されていたことを示す。その活動と言論の拡大によって、安倍政治の正統性を左右する「権力」（コミュニケーション的権力／ハーバース）が生まれていることは確かだ。日本における新しい民主主義の登場と評価する議論は多い。この夏が日本の政治文化の画期となることは間違いない。

3) インストラメンタルな民主主義への回路

「コンサマトリーな民主主義」というタイトルは、もとより民主主義をコンサマトリーな経験に還元しようとするものではない。いま私たちが眼前にしているのは、インストラメンタルな民主主義とコンサマトリーな民主主義とのあきれるほどの乖離である。そしてコンサマトリーの側には、充足した者たちの民主主義という面も見える。図表6は、「お宅の生活の程度は、世間一般からみて、どうですか」と聞く生活程度の調査と生活満足度との関係である。データは全年齢対象だが、生活への「満足」は「中の中」以上の生活程度で高く、そこから激減する。コンサマトリーな経験が意味と社会的協同に関わる側面を強調してきたが、それは同時に一定の物質的な生活条件の充足というインストラメンタルな経験と切り離せるわけではない。

2007年に「31歳フリーター。希望は戦争。」というサブタイトルの小論が広く注目を集めた。不安定な低賃金労働を強いられ、「一人前の男」として尊厳を奪われた若者にとって、戦争こそが、国家のために戦う兵士として尊厳を回復する最後の希望だというのである（赤木 2007）。意味と社会的協同への渴望が権威的な国家幻想へと反転する構造は、いまの時代もいよいよ無縁ではなくなっている。インストラメンタル／コンサマトリーの乖離は、ここでは若者の内部で戦争をめぐる対立となる。「戦争反対」をコールするコンサマトリーな民主主義は、格差を拡大し、意味と社会的協同を剥奪する目下の経済・政治システムの転換に照準を合わせ、その実現に向かうインストラメンタルな民主主義を同時に必要とする。

[文献]

- 豊泉周治『若者のための社会学——希望の足場をかける』はるか書房、2010
古市憲寿『絶望の国の幸福な若者たち』講談社、2011
大澤真幸「「幸福だ」と答える若者たちの時代」、『atプラス』07、太田出版、2011
村上泰亮『産業社会の病理』中央公論社、1975
千石保『「まじめ」の崩壊』サイマル出版会、1991
D・リースマン『孤独な群衆』みすず書房、1964（原著1951）

T・パーソンズ『社会構造とパーソナリティ』新泉社，1973（原著1964）

J・デューイ『経験と自然』人間の科学社，1997（原著1925）

H・アーレント『暗い時代の人びと』筑摩書房，2005（原著1968）

赤木智弘『若者を見殺しにする国』双風舎，2007